

- 小矢部市及び高岡市福岡地域は、水稲、大麦、大豆が主体の地域であるが、より収益性の高い新たな品目の導入が望まれていた
- このため、水稲などとの作業競合が少なく、機械化体系が確立されている「加工用キャベツ」を導入し、栽培マニュアル作成等の技術支援を実施
- その結果、栽培面積、出荷量及び出荷額が大幅に増加。また、単収も増加し収益力が向上

具体的な成果

普及指導員の活動

1 作付面積の増加

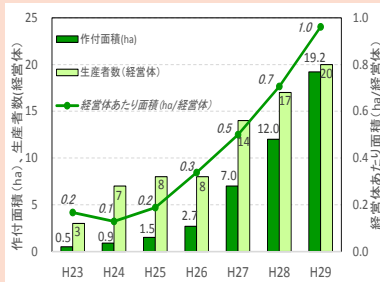
■ 作付面積、生産者数が増加傾向であり、農家の収益も向上(H23→H29)

① 作付面積

0.5ha → 19.2ha

② 生産者数

3経営体 → 20経営体



2 省力化作業体系の確立

■ 播種、施肥、定植等に係る省力機械の導入を推進

■ 追肥回数を慣行(追肥2回)よりも減らした省力施肥体系を確立

① 播種、定植  
全自動移植機  
100%

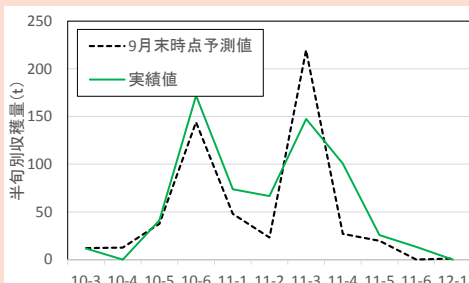
② 追肥回数

2回 → 0回(71%)

主な作業	H23	H27	H29
播種	播種板		全自動播種機
定植	手植え		全自動移植機
追肥	2回		0回 (71%) 1回 (29%)
収穫		手収穫	手収穫 (80%) 機械収穫 (20%)
集荷	JA施設		JA集出荷貯蔵施設
貯蔵		民間冷蔵庫	

3 計画的な生産・出荷

■ 生育調査に基づく収穫予測により計画的な生産・出荷が可能



平成24～26年

- 大玉生産に適した品種の実証ほを設置
- 水田での栽培であることから、排水対策の徹底を指導
- 省力化を図るため、全自動移植機の実証を実施

平成27～28年

- 省力化を図るため全自動播種機の実証と、その結果に基づく普及を支援
- 主穀作農家にもわかる栽培マニュアルを作成
- 追肥回数(慣行2回)を減らした施肥体系の実証ほを設置

平成29年

- 新たに合同育苗巡回を実施することにより、細やかな指導を実施。
- 機械収穫及び中耕除草の実証による更なる省力化を推進

普及指導員だからできたこと

・ 専門技術を持ち、試験場や他県の技術を知る普及指導員だからこそ、地域に適した栽培方法を確立し、定着させることが可能

・ 日頃から連携しているJA、研究機関、県行政、民間企業等の関係者とともに、産地全体の取組みを進めることができた

# 新たな加工用キャベツ産地の育成 ～主穀作依存からの脱却～

活動期間：平成24年度～

## 1 取組みの背景

J Aいなば管内（小矢部市及び高岡市福岡町）は土地利用型農業における主穀作への依存が県内でも特に高い地域であるが、近年の収益性低下を受け、「ハトムギ」を1億円産地づくり戦略品目に選定するとともに、平成23年からは「加工用キャベツ」を重点品目として主穀作経営体への導入を推進し、ゼロからの産地化を図ってきた。

産地化にあたっては、加工用キャベツの特徴を活かすため単収の向上と省力化を推進するとともに、販路の拡大に併せ、新規生産者の確保や計画的な生産・出荷に向けた普及活動を実施した。

## 2 普及活動の内容

当センターでは、平成24年度から普及指導計画の中に本課題を位置づけ、関係機関と連携して産地化を強力に推進・支援した。

### (1) 単収の向上

- ・大玉生産等に対応した品種の探索と導入、初期生育量の指標設定、単収向上モデル経営体の設置、排水対策の徹底指導等により単収向上を支援した。

### (2) 機械化・省力化

- ・播種、施肥、定植等に係る省力機械の導入を推進するとともに、機械収穫や機械除草等の実証（図1）を行った。
- ・田植えや稲刈りと時期が重複する追肥作業の省力化を図るため、追肥回数を慣行（追肥2回）よりも減らした省力施肥体系の実証・普及に取り組んだ。

### (3) 新規生産者の確保・技術向上

- ・主穀作経営体を対象とした園芸導入研修会の開催やJ A広報誌等により新規生産者を掘り起こすとともに、主穀作経営体向けの栽培マニュアルの策定、播種・収穫前研修会の開催、新規経営体への重点指導等により技術の向上と高位平準化を支援した（図2）。

### (4) 計画的な生産・出荷

- ・定植時期・品種別の生育日数の設定や播種・定植計画の策定支援、生育調査に基づく収穫予測および保冷庫の入出庫・在庫量シミュレーション等を行い、契約栽培に対応した計画的な生産・出荷を支援した。
- ・更なる出荷量の拡大と安定的な長期出荷に対応するため、新たな集出荷貯蔵施設の整備と整備後の稼働円滑化を支援した。



図1 機械収穫に係る実証



図2 策定した栽培マニュアル

## 3 普及活動の具体的成果

- ・作付面積、生産者数、経営体あたり作付面積、出荷量、出荷額が増加するとともに、新規生産者の増加に伴い一時低下した単収についても向上した（図3、4）。
- ・作業の機械化や省力施肥体系が普及し、大幅な省力化が図られた（表1）。

- ・平成 29 年 9 月に集出荷貯蔵施設が新設され（図 5）、集出荷体制の効率化と出荷期間・出荷量の拡大が図られるとともに、天候不順年においても契約に対応した計画的な出荷体制が整い、実需者からの評価も高まり取引量の更なる拡大が期待されている。

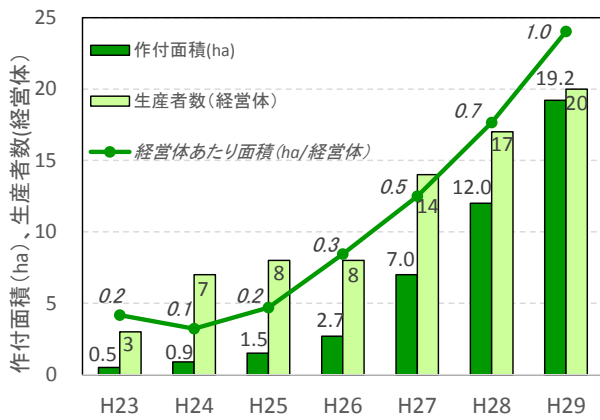


図 3 作付面積および生産者数等の推移

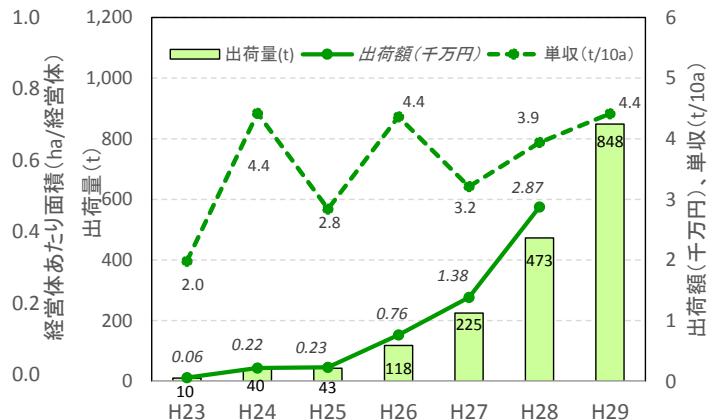


図 4 出荷量および出荷額等の推移

表 1 機械化省力栽培体系の普及の状況

主な作業	H23	H29
播種	手播き（播種板）	全自動播種機
定植	手植え	全自動移植機
追肥	2 回施用	1 回施用又は無施用
収穫	手収穫	手収穫、機械収穫（20%）
集荷	JA 施設（1 次集荷）	JA 集出荷貯蔵施設
貯蔵	民間冷蔵庫	



図 5 新たに整備された集出荷貯蔵施設（H28：産地パワーアップ事業）

#### 4 農家等からの評価・コメント（JAいなば 営農部 営農生産課長）

生育指標の設定と一筆ごとの数値化の取組みは、収穫予測を数値に基づく精緻なものにし、集荷・貯蔵・販売計画への反映だけでなく、次作における播種・定植計画の適正化にも結びついた。これにより異常気象年においても計画出荷を行うことができ、実需者評価の向上や産地の拡大にもつながったと感じている。

#### 5 普及指導員のコメント（高岡農林振興センター 園芸振興班長 飯村 成美）

JAいなばの加工用キャベツ生産はそのほとんどが主穀作経営体で取り組まれている。主穀作経営体における園芸品目の導入では、排水対策の不徹底、園芸担当者が不明確、主穀作との作業競合等問題が生じやすいが、JAと連携したきめ細やかな栽培マニュアルの作成、ほ場巡回の実施、省力栽培体系の普及等により平均単収は県内トップとなった。この事例を園芸導入経営体の定着化に活かし、園芸部門が経営の柱となるよう努めていきたい。

#### 6 今後の展開

JAいなば管内における実績が評価され、加工用キャベツは本県が進める 1 億円規模の園芸産地づくりにおいて平成 29 年度から広域産地形成品目に選定されたところであり、県域での産地化を図る。